

関羽の大刀を奪い得て手に入るが如く

奪得関將軍大刀入手

空 第10番

摩訶般若波羅蜜多心經 觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊
皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行
識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中
無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識
界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得
以無所得故菩提薩垂依般若波羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖
遠離一切顛倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅
三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神咒是大明咒是無上咒是無等等
咒能除一切苦真実不虚故説般若波羅蜜多咒即説咒曰 羯諦羯諦波
羅羯諦波羅僧羯諦菩提娑婆訶 心經

戦地に赴いた初めの頃、任地の戦況はかなりののかなもので、厳しく鍛えられた精鋭兵であることを自負していた彼らは激戦区と聞いていたせいもあって、キツネにつままれたような気持ちだった。

最新兵器と最新装備と最新の戦車を備えた世界最高峰の彼らの国の軍隊は、早朝の集合点呼の後、CK（コンテナキッチン）で暖かいものや冷たいものを飲食し、乾燥地帯を砂土の煙を上げて次の野営地まで進む。装甲車輛の中は広く涼しく、荒れた岩地でも起伏ある柔らかな砂地でも、上下の動きを抑制し、快適な乗り心地を確保する足回りを持つていた。走行時間も僅か数時間だ。着けばまた設営し、後は自由時間だった。本を広げ、横たわる。簡易ベッドはゆつたりとしているが、しなやかで堅く、ゆつくりと沈み、疲れを吸い尽くす。

会話ものんびりしたものになりがちだった。

つい先日にも彼は聞いた。長い午後の時間、若い二等兵のラクイーネ・バンバ・タタラが渺茫たる沙漠を眺め、風音が反って静寂を際立たせる中、ぼうつと言つのを。

「広いですね」

「海ほどじゃない」

上等兵のシン・チコ・シラフネが煙草を啜えながらそう考える。彼は二十代後半だ。バンバと違って髭はない。変わらず遠い眼でバンバは、

「何もなくて。果てが霞んではつきりしません」

「あゝ。蒼穹があるだけだな」

「それでもこの星主体から見たらさほどじゃないんでしょうね」

「山の高さだつてそうさ。最高峰も球体の表面のちよつとしたざらつき程度だろつ」

「凄いですね。俺たち何なんでしょうね」

「星一つで、そんなこと言つてちゃだめだぜ。宇宙はもつと広い」

「どのくらいですか」

「観測可能な範囲で半径⁴⁶⁵億光年」

「（絶句）……想像が付きません。光つて1秒間に30万kmも進むんですよ？」

「1秒でこの星を7周半する」

「たった1秒で！ 1日だったらすごい距離になるんでしょうね？」

「ああ」

「それが1年だったら、もう⁴⁶⁵億年なんて、ああ、⁴⁶⁵億年という年数自体、想像も付きません。千年だつて大昔なのに。半徑つてことば直径なら⁹³⁰億光年なんですか？」

「さあ。私も形状がよくわからないから、何とも言えないな。しかも、観測可能な範囲で、という限定付きのよう

だし」

「そうでしたか。いや、興味が尽きなくて。じゃ、だいたい、宇宙の歳は465億歳なんですね」

「いや、138億歳だ」

「これは意外ですね。じゃ、ビッグバン以降の宇宙の拡張スピードは光速よりも速かったんですか。この世で光速より速いスピードは物理的に存在し得ないんだと勝手に思い込んでいました」

「私もそうだ。よくわからない。しかし、そもそもスピードというものは物質の移動、つまり言うか運動の速さであって、つまり時間や空間がなければ成立しない。ところが時空は宇宙の後に生まれて来たんだ」

「どういことですか」

「宇宙の誕生前に空間があつてそこを宇宙の拡張が疾走したわけじゃない、つてことだよ。空間のないところでの、と言うか空間を後に造りながらの運動速度、スピードつて、いったい、何なんだ、つてね。」

頭がこんがらがってよくわからない」

「できている空間を走っているのではなくて、空間のないところを走っている、つてことですか…いや、全然わかりません」

「この話は止めよう。昼飯が消化できなくなる」

「そろそろ晩飯にしませんか」

光はやや金色を帯び鬚りが伸びて太陽が僅かに傾き始めていた。彼は聞き終えて微笑む。余暇があれば人は芸術や哲学に走るものだ。

レオ・イーサもこの時期、よく本を読んだ。戦場に来れば心の平穏が必要になると思つて、電子ブックに仏教関係の本をいっぱいダウンロードしてきていた。彼ら外国兵士が私的なネット環境を整えられることなどあり得ない場所だったので、ダウンロードして来るしかなかった。

禅宗の『無門関』や『臨濟録』などを読んでみると、上官がよく嫌味を言った。

「暢気なもんだな。禅問答か。看話禅！ わけのわからない御託をならべ、言説を弄する徒だ」

「お言葉ですが、リユージュ少佐、『仏に逢つては仏を殺し、父母に逢つては父母を殺す』という自由闊達の気魄が死を決す戦士の精神にそぐわぬとは思えません」

「ふ。好きにするがよい」

そう言うリユージュは憂鬱で哲学的な痩身の青年だった。6フィート5インチで筋骨たくましいレオに言説を弄する徒などと批判をするなんて！ 見た目にはあべこべだった。だいたい、レオのような肉体派の人は少しくらい憂鬱になった方がホルモンのバランスは良くなりそうである。

リユージュはシルヴィエ軍の中では変りダネだった。元々は北大陸（フルテ）の小国であるサヴァイ侯国の中尉

で、帝国軍最強の精鋭『屍の軍団』をも打ち破った隊に属し、叙勲もされたが、貧しいゆえに金で凋落され、神聖シルヴィエ帝国精鋭部隊の少佐の地位に就いた。

シュー・ヘイカン・タ・イシュダーミ少尉が晩飯のときにレオの隣に坐った。レオよりさらに大きく、7フィート近い。腕は木の幹のように太い。

「よお、おまえはどう思う」

「別に？　つて言うか、何が？」

「このお気楽な行軍さ」

「さあ、考えたこともない」

「このままならいいが、よく考えてみる、俺たちは正確な目的や、作戦の内容を知らされていない」
「言われてみればそうだ」

「おまえ、よくそれで士官学校を卒業で来たな」

「僕は陸軍大卒出身さ」

「え、年上だったのか？」

「いや。飛び級で進級したから同じ年のはずだ」

「何級飛んだんだよ」

「計算しろよ、陸大は高卒後6年、士官校は中卒後の6年、つまり3級さ。中学は1年、高校は2年しか通っていない」

「天才レベルだな」

「今知ったのか」

「しかしその知恵を使っていないな。俺は頭の良さっていうのは未来を予測できる能力、問題を解決して未来を切り開く能力のことだと思う。その点から言えば、おまえは愚かだ」

「なるほど。そうだな。呑むか？」

「お、いいね。付き合っぜ。バーボンにしよう」

「じゃあ、バーボン2つ。それから葉巻を持って来てくれ」

給仕が盆に載せてくる。彼の階級は上等兵だった。輜重部隊食糧部門一般連営部に属する。

「で、シュー、君は未来を予測できたのか？」

「いや」

「じゃ、同じだ。無駄な努力をしないのも未来予測能力さ」

ガラスのない、上下開閉式の窓の外は沙漠の月光。鏤められた満天の星燦。ジプシーの歌が聴こえる。沙漠の獅

子が吼える、と歌っている。

「おかしいと思わないか、規律を厳格に守ることを非情なまでに優先し、がちがちの管理体制を敷く我が国の軍隊でジプシーが歌うなんて。まるで」

「まるでんびりしているんだぜってアピールしているみたいだって言いたいんだろう。僕もそう思う。理由はわからないが。わからなくても、軍の企みに協力しているつもりだよ。こっやって外から見えるよう窓辺で無防備に呑んでいるのもそのためさ」

「前言撤回する。おまえは賢い」

そうでもなかった……

将校はすべて集められた。中隊長リユージュ少佐から告げられる。

「これから特別任務を開始する。

直ちに車輛や重火砲や飲食物などを捨てて出発する。各人持てるだけの武器と装備と水と糧とを持て。今すぐ進軍する。ただし情報部隊は情報機器を、通信部隊は通信機を忘れるな。行動は外から見えぬよう隠密たることを最大の留意とせよ」

ちなみにシルヴィエ軍の基本単位は、少尉の統括する1班5人編成、中尉の統括する1分隊25人編成、大尉の統括する1小隊100人編成、少佐の統括する1中隊1千人編成、中佐の統括する1大隊1万人編成、大佐の統括する1連隊10万人編成、少将の統括する1師団1百万人編成、中将の統括する1旅団1千万人編成、大将の統括する1軍団1億人編成、全軍は3軍団で正規軍3億人、予備隊2億人、総勢5億人で国民の10人に1人が軍隊に關与する計算になる。こどもや老人を除けばその率はもつと高い。

情報部隊がリーダーで周囲の状況を確認しながら夜陰に紛れて行動する。やや屈み気味に小走りで進軍しなければならなかった。三〇分ごとに休憩に入ったが、レオは相当苦しかった。班長の面目もなくなり捨てたくなっている。

「酒なんか呑むんじゃないかな」

健康な状態でも起伏が激しく足を取られる沙漠の行軍は軀軀に堪える。しかもどのくらい歩くのか知らされていない。かなり辛い。「もう歩き通した、どこまで行くのか……」見上げれば天には絶望的なくらい無限の星空。

「自惚れると確実に天罰つてやって来るものだな。いつまでたっても、ちつとも成長しない。糞ッ、もう一度と失敗しないって先週誓ったばかりなのに」

彼の班には部下が4人いた。軍曹と上等兵と二等兵2人。軍曹が副班長役だが、既に五十歳を超えたその鬚面の

老兵は言う、

「失敗しない人間なんていけません。今後気を附けるが、気にしない、気に病まないことです。大事なことは

心に留めるが、気に病まないことですよ」

「なるほど。妙言だな」

夜明け前に小さなオアシスに着く。

村は惨殺の後だった。死骸は女や子どもだらけだった。男は戦場に行ってしまったいなかったのだろう。

「少尉殿、これは、いったい、どういふことでしょうか」

リコが驚愕の表情で訊く。

「僕にもわからん。たぶん、そろそろ会議が始まるだろう。恐らく上層部も想定外だったと思う。備置を捨てているから、ここで昼間潜伏して飲食休憩する予定だったはずだ。しかしどうやら行動が見破られている。先を越されたらしい」

「だとしたらまずいですよ。どこかでこちらの様子を窺い、奇襲をかけてきますよ」

「ああ、ここは危険だろうね。しかし……」

惨たらしいな……。これが自分の家族だったらと思つと胸が張り裂けそうだ」

「酷いですよね」

「人はここまで人に残虐になれるものなのか」

将校はすぐに石集まれ、会議が始まった。リ्यूジュが説明する。

「即座に斥候隊を配して村の様子を調べたが敵はいない。近くのナツメヤシの林も調べたが皆無だ。ここに来るまでにリーダーで調べながら来たのだから大きな敵の部隊がいなくて当然だが、しかし普通に考えれば待ち伏せし、奇襲や挟撃を仕掛けるのが定石のパターンだ。恐らく敵は少数に違いない。いずれにせよ、確証はない。ともかくも戦闘態勢に入れ」

「中隊長、やはりここで潜伏の予定だったのですか」

シューが質問した。リ्यूジュは物憂げに応える、

「そうだ。さらに夕方に、ここから別の場所に移動する予定だった。今はそれ以上説明しない」

「彼らは我々のせいで犠牲になったのか……」

「もう考えるな。想定範囲だ。時間はない。全員、市街戦Bの態勢に入れ。情報部隊を本部にする」

しかし戦闘は起こらなかった。焼けた干乾煉瓦の屋根の下に入り、見張りを入念に立てながら武装を解かず休憩し、仮眠の合間に腹部のジップ付きホルダーに入ったPCを開いて指令を確認しつつ時間を過こし、夕闇ともヘルメットに付いたグラスを下ろし、出発する。耳に付けたイヤホンからは指令が入る。

「情報部隊は歩きながらもリーダーを見続ける。最後尾の班は尾行に注意しろ。絶対につけられてはならない。スパイの潜入にも十分注意しろ。常に顔を確認し、見慣れないと思つたら必ず確認しろ」

暗視装置付きグラスはAR機能 (Augmented Reality 拡張現実) によって風景に情報を附加する。見えているものに関する情報がグラスの裏側に浮かび上がる。オーバーレイする。仕組みだが、こんな沙漠では何も出ない。ただ情報部隊のリーダー探知情報と一致するので一定の心的な安心が得られた。それでも少数のゲリラ部隊などは捉えにくい。身を守る場所のない沙漠で、どこに敵が潜んでいるかわからず、不安を抱きつつ、周囲を警戒しながら進む。神経が消耗した。口にくわえたチューブで電解質の入った水分を摂取する。息が白い。沙漠の夜は凍えるように寒い。

バンバがリコに言う、

「この前の宇宙の話なんですが」

「何だっけ？」

息を切らしながら応える。

「宇宙ができてから時空ができたって話です」

「あゝ、ハアハア、そう言えばあつたな」

二等兵ゴロー・アマクサが口を挟んだ。

「へえ！ 意味わかんないけど、すげえな」

それを無視し、

「考えたんですけど」

「何だ？ 考える気力がないんだが」

「宇宙ができる前って、時間も空間もないんですから、何もなかったんですよ」

「たぶんな」

「本当に何もなかったんだと思います。何かが起こるスペースも、動きが進む時間もないならば、当然そうだったと思います。想像すらできませんが、それでいいんだと思います。何も無い、って想像できちゃったら、それは『ある』ですね？ かたちがあることになっちゃうから。だから無って、わからない、知らないことなんです」

ゴローがちやちやを入れ、

「じゃ、俺もわかってるんだ。理解してるんだな。何しろ、おまえの言うこと、全然わかんないからな。あはは」
リコは笑う気にもならず、

「そうだな、ゴロー、おまえが一番わかってるんだな。そういうことだ。そうさ、ハアハア……そうだな。
バンバ、そう言えば、無すらもなかったと言った物理学者がいたような気がする」

「本当ですか？ どんな名前の人か憶えていますか？」

「いや。本当にそう言った人がいたかどうかも定かじゃない」

「残念です。何もないのに、何が原因で宇宙は熾ったんでしょうか。それが気になりました」

「あはは、考えてもわかるもんか、わかつちやおかしいんだろ？ 何もないのに！ ははは、あゝ、可笑しい。原因なんてありやしねえのさ、あははははは」

「ゴローが何々大笑してからかうと、リコとバンバとはびたつと止まって顔を見合わせる。

「な、何だよ、何なんだよ」

バンバが顔を輝かせる。

「そうか。そのとおりだ。そういうことか！ ああ、わかった！ 無じやないんだから。……いや」

リコもふつと笑い、

「あゝ、どうやらそういうことだ。さ、黙って歩け。もう私も限界に近い。いずれにしろ、なぜ起こったのかはわからない。無たつたんだから、わからなくて辻褄は合ってるのかもしれないがな。もう思考外だぜ。さあ、私はもう休みたい、それだけだ。それしかない。……そういうことだ」

「俺の頭の中で、今、『色不異空 空不異色 色即是空 空即是色』という聖句が繋がりました！」

天穹に鑲められた星々はきらきら瞬きのよう燦めき、見上げる頭上の遙かな高さから見下ろす。眩暈を覚える。途方もない沈黙が響鳴していた。数時間後、黎明の兆しが空を濃紺に変える。やがてブルーに。蒼みがかった透明に。やがて黄金を帯びてくるのだろう。しかしそんな詩情が興ることもなかった。

困憊の極みに達した頃、夜明け前の光に丘が見えた。「ここだ」 中隊長が言った。

荒涼とした一つの岩からできた丘。あちこち深い亀裂があり、凹凸がある。よく見るとそこに兵が配備されている。居住する設備もある。兵器も垣間見られた。物語のようであつても、幻ではない。神聖シルヴィエ軍精鋭部隊だ。幻想の都市のようであつた。

「こんなことだったとは。眼のあたりにしていなかったならば信じなかったでしょう」

「敵を欺くには味方からだ。秘密の秘密さ。極秘の大作戦なんだ。直前まで敵に悟られてはならなかった」

リユージュがそう言う。レオは

「どのくらいいるんですか」

「二個連隊がここにいます」

「10万！」

「地下には火砲付きモジュー装甲戦車5千台、自動装填機関銃付き小型装甲車5万台、戦闘用ヘリコプター5千機が格納されている。全部はらばらにして小型 輪装甲連搬車で運び、ここに組み立てた。30日分の水と食糧も運び込まれている。膨大な人材を投じ、僅か2週間で仕上げた」

「凄く」

「圧倒的な人員と物資がある我が国でしかできない奇蹟だ。

」そのほかにここから1キロメートル離れた峡谷に一個連隊、オアシスが涸れて廃墟となった村に一個連隊が配備されているはずだ。敵軍の秘密の砦、地下基地を囲んで奇襲をかけ、一気に潰滅させる作戦だ」

「だがこちらの動きを敵が察知している可能性があります」

「わかってる。今幹部で検証中だ。それで今後の作戦を決める。いずれにしろ、すぐに結論が出るだろう。考える時間が長いほど危険だ」

「了解」

だが1時間後、レオは露骨に苛々しながら少佐の部屋の中を左右に行ったり来たりしていた。他の将校は坐って葉巻を吹かしているが、リ्यूジュは携帯用小型レーダーを見ていた。表情はわからない。

「まずいですよ、少佐」

「わかってる。時間がかかり過ぎているのは確かだ。優柔不断か。撤退や作戦変更ができないんだ。上層部にいい顔をしたがる奴ほどそうだ」

「まさか幹部にスパイが」

「だったらもう考える必要はない。諦めて死ぬしかないな」

「何てことだ。世界最新最高の装備があるのに！」

伝令が来た。

「少佐、お呼びです」

「わかった」

レオは眉を蹙め、嘆息する。果たしてどんな結果をリ्यूジュは持って帰るだろうか……

「予定どおり作戦を実行する」

「そんな真逆な。わざわざ自滅するようなものです」

「命令だから仕方ない」

「すべての連隊長が同意なのですか」

「そうだ。決まってるだろう。そうでなければ決定じゃない」

「わかってます、しかし」

「出発は夜だ」

1kmほど行った場所で待ち伏せ（しかも分散してレーダーにかかりにくくしていた）していた敵軍に襲撃され、まずは情報部隊をやられ、応戦しようと進むと落とされ穴で、駱駝の群れをけしかけられ、炎の矢に攻められ、それでも数で圧倒的に有利だったせいもあると敢然と闘うも、爆弾を背負って駱駝に跨る兵に粉砕される。

他の連隊も同様な状況であった。

廢墟のある洞れオアシスに撤退し、敵を迎えることになった。

レオは負傷していた。

「くだらないな『色即是空』^{じきくそくう}」と言ったって現に「いつて苦しんでいる。これをどうにもできない」

それを聞いてリユージュが、

「くだらないことをしゃべるな。体力が奪われる。汗を拭け。…熱があるようだな」

「少佐殿も敵が来る前にその包帯を換えて、添え木をちゃんと付け直した方がよいですよ」

「ああ、わかつてる。気にしないようにしているだけだ」

「気にしなくても、やるべきことには細心にやらなければ」

「ふ。そのとおりだ」

「何だかわかったような気がします」

「何が？」

『色即是空』の意味が

「ほう」

「わかつておられるくせに」

「そうか」

「人生に責任は負うが、苦しまない、それが『色はすなわち空である。空はすなわち色である』ということです。

僕はそう思います」

「そうだな。あたりまえな人間ということさ。平常とは言葉に尽くせないものだ。

五臓皆空と言ったって、おまえだつてその苦痛から解放されたいだろう。こどもや親が殺されるような運命からは免れたいだろう。愛する者が助けを求めるのに振り回らないでいることなどできないだろう。惨たらしく虐殺されるのをただじつと黙つて見ていることなどできないだろう。おまえだつて災難や悲劇からは遁れたいだろう。終わりの見えない解決不可能な難難苦から赦されたいだろう。その想いをどうにもできないだろう、この気持ち。現実を変えられない、この苦しみを。堪えるだけでも精いっぱいだろう。辛うじて堪えても、心が苦しまないことなどできないだろう。

空だと言ったって実体があるのと同じだ。がちつと実存する。切実に迫真し、生々しく己むに「生まれず、うめき、足掻き、掻き、汗打ち、まろび転がり、血反吐吐き、歯噛みし、食い縛り、地団駄し、涙零す。それが厳然と確かに、硬くがつしりと、どつしり重厚に、明晰に鮮やかに、くつきり深く濃く存在するというだ。現に眼の前にあつて、手に触れられ、皮膚を裂く。動かずにいられようか。叫ばずにいられようか。情動せずにいられようか。つまり、それが実在だ。実在ということだ。空と言ったって、いや、空かもしれないが、それが何だ？ 現に苦しみ、現に切迫し、待つてくれない。色即是空（空即是色）とは、そういう意味だと私は観ずる。実際、切実だ。空とわかつ

でもどうにもならない。やるしかない。だから闘う。銃を持て。空論は後で語ろう。自動装填機関銃の弾倉に、弾丸のホルダーをぶち込め。装填するんだ。さあ、安全装置を外せ、構えて待とう。ほら、迫っていないか？ スイツチを入れるんだ。撃つんだ。それしかない。

そらっ、敵だっ！」

レオはマシンガン撃った。

敵は斃れた。数十名の尊い命が僕に奪われた。気に留めるが、気に病まないことだ。これからも生命を大切にしよう。だが生きることとは闘うことなのだ。

註…『色』とは物的現象『空』とは『零』の意味で『ない』といふこと。